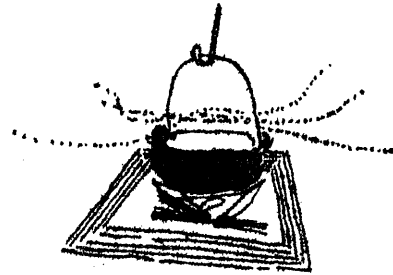


私の保育



早川好江

子ども達が荒れている。積木は散乱し、切りくずは床の上にばらまかれている。あちらでぶたれたと泣く子がいれば、こちらでは、今しも掴み合いが始まるところ。

私はといえは、事後処理に追いまくられて、右往左往するばかり。

惨たんたる有り様の保育が終わり、掃除を始める時に

は、溜息の連続。どうしてこうなってしまったのだろう。雨のせい？ 休み明けだから？ 行事が続いて遊ぶ時間がなかったから？ 確かにそうかもしれない。だが、まてよ、避けられない事柄に原因を求めるのは逃げではないのか。たとえ条件は悪くとも、子ども達を荒れさせってしまったのは、私に手落ちがあったのだ。どこですればよかったのだろう……。

思えば、この四年と数か月は、具体的な現象は様々ながら、前述のように、失敗しては後悔し、反省する。その繰り返しであった。その中で得てきたものが、現在、私が保育する上で注意していることになるのだが、以下にその代表的なものを幾つか並べてみたいと思う。

子どもが、ロッカーの上に乗ってしまった。いつものら、「あれ？」と声を立て、顔を見るだけで気がつき、「アッそうだ。」と降りるのに、降りない。そこで一言。

「降りなさい。」

子どもはどこで、私の体調の悪いことを、見抜くの

だろうか。たとえそれが、子ども達のことを悩んでいた結果であっても、睡眠不足や、疲労感を覚えている日には、子ども達の反応が鈍くなる。——いつもなら降りるのに降りない。——声をかけるタイミングがずれ、それを彼は感じるのだろうか。さらに、思考力、判断力も低下。子どもへの働きかけが、直接的、指示的になっていく。——「降りなさい。」——

「ロッカーの上にいるのはおもちやかな。」とか、彼をやさしく抱き上げて降ろすとか、方策はまだあった筈なのに。小さい出来事ではあるが、一事が万事、積み重なっていった、その日の保育は、かみ合わないまま終わってしまったのである。

この出来事は私に、私には自分の体の不調を補える精神か、技量が足りないことを教えた。プロとしては恥ずかしい話であるが、認めないわけにはいかなかった。

それ以後、子ども達の健康だけでなく、私自身の健康管理にも、気を使うようになったのは言うまでもないが、不調だと自覚した場合には、普段以上に五感を働か

せるように努めているこの頃である。

このところ、ケンカが多い。全体的に苛立っている。

気の弱いKが、一人でいじめられている姿が目立つ。甘えん坊のGとNは、いつも以上にベタベタしてくる。どうしたのだろう。

肉体的な健康以上に、精神の健康——いきいきしていること——は大きな意味を持つ。

この時期、私はプライベートなことで悲しみに沈み、子どもと過ごすことで、自分を励ましている状態であった。子ども達の様子に、どうしたものかと悩みつつも、自分の精神状態と結びつけることもなく、具体的な方策のとれぬまま、その学期は終わった。だが、新学期を迎え、私が悲しみを乗り越えた時、子ども達にも、落ち着きと、快活さがでていたのである。

保育は、私と子ども達とでつくりあげていくもの。私の心がいきいきと動いていなければ、子どもの心も動かなくなる。この確かな事実を、改めて気づくと同時に、

その存在だけで私を力づけ、私と一緒につらい時を送ってくれた子ども達を、心の底からありがたいと思った出来事であった。

「手紙を折るのを手伝ってくれない？」と私。「イヤダヨ。」とT。手先を動かすことの苦手な彼が、いかにもめんどうという調子で答える。（だからこそ、やらせたいのだ。）「でも、やって。」仕方なく、彼はやり始める。

私が、彼に手紙折りを頼みたいと思った動機は、よく見て、きれいに折るということだけでなく、私と同じことをしたり、皆の役に立ったと思えることは、彼にはとてもこちよいものではないかということだった。だがいつの間にか、彼にやらせるのだという意思だけが強くなり、「イヤダ。」という彼の反応に「やって。」と半強制することになってしまった。表面的には、手紙を折るという目的を達したように見えるけど、これでは、彼の得るものは殆どない。

「手伝ってくれない？」「イヤダヨ。」「そう、残念だわ。

あなたと一緒にやりたかったんだけど。」立ち去らず、私
のまわりに居続ける彼。「手伝ってくれる?」「いいよ。」
私に、もっとゆとりがあり、彼の気持ちを受け入れ
て、彼に合わせていけば、このような展開になっていた
かもしれない。

子どもに教えたい、伝えたいという意思が強くなる
と、こうなる場合もある。

これ、なんだか、すぐに壊れそうなおうちね。(積木
遊びのコーナーで)おや、ゴミが落ちている。あら、水
が出っ放し。廊下は走らないのよ。ハサミはどこにし
まうのかな。……不意に気づく。アサカラ ワタン チ
ユインタバカリ。コレデハマルデ ガミガミサンダ。

保育者として、子ども達にこうなっはほしいという希
望を、態度で表わし、言葉に出していくことは当然のこ
とである。時には、それを課題として提示することもあ
る。だが、それに気を奪われると、もっと大事な、「共
感しあう」「受けいれる」ということができなくなる。

「先生はわたしのことを好きなんだ。」「ぼくの気持ちをよ
くわかってるな。」この思いがあるからこそ、子ども達
は、保育者の要求に応えようとしてくれるのに、そこが
抜けて、私の要求を出していくだけになってしまうの
だ。

そうならないために、一つ、感じているのは、子ども
に何かを求める場合、「今だ!」という時を逃してはい
けないということである。

たとえば、登り棒に登れるようになるという目標に対
して、子どもに体力が付き、やる気もできた。だが、
何だか怖くて躊躇している。その瞬間に声をかければ、
彼は、「よし、やろう。」と取りかかるが、その前でも、
やっぱり怖いからやめよう。」と結論を出してしまった後
でも、彼は、「エー、やるの」と渋ることになる。その時
を逃さぬよう、子どもを観る目を養うこと、その「時」
を予測し、ふさわしい対応ができるよう、いろいろな遊
びの知識を貯えておくことが、もっとも必要である。
それにしても、ともに遊びつつ、伝えるべきことを伝

えていくのは、本当に難しく、丁度、振り子の様にあちらとこちらを、往ったり来たりしている毎日である。いつになつたらバランスがとれてくるのだろう。

他にも、時間のとり方を間違えた為の失敗、自信の無さ故の失敗等、数えあげればきりが無いが、どうやら、私の失敗の共通点は、何かに心をとられて、子どもの心が見えなくなっている為と言えそうである。

この時、私の態度は、子どもを中心に、子どもにも合わせて、私の行動を変えていこうというのではなく、私に子どもを合わせようとしている。子どものやりたいこと、やってほしいことを、私が汲み取れない為に、子どもは落ち着かなくなり、そのことで私は、さらに頑なになり、子ども達はますます苛立っていく。悪循環である。

このような時、ハッと気がついて私の姿を眺めてみると、うつむいて、目の前の子どもしか見ていない、笑みがない、言葉じりがきつい、体をよく動かしていないの幾つかは、必ず当てはまっている。

つまり、これらが、子どもの様子がおかしい、かみ合っていないと感じた時の、私の側のチェックポイントであり、保育にあたって、まず第一に気をつけていることなのである。

私の保育というテーマであるが、保育そのものよりも、保育者としての私の有り様を語るだけになってしまった。それだけ、私が、保育者の役割の大きさ、難しさを、感じているということか。

だが、ありがたいことに、子ども達は、私のミスに対してだけでなく、私が悩み、こうしたらと工夫していったことに対しても、すかさず、明るい笑顔を返してくれる。その笑顔が私に喜びを与え、もっと笑顔を引き出したいとやる気を起こさせるのだ。

もうすぐ、行事の多い二学期。子ども達みんなが、やる気をもって取り組み、終わった後で満足が味わえるような保育をしたいものだ。

(千葉県・日出学園幼稚園)